

「若手の会企画による小集会 (9)」 開催報告

岩佐倫希¹⁾・曾根千晴²⁾・辻本泰弘²⁾・出口哲久¹⁾・服部林太郎³⁾・林怜史⁴⁾・林智仁⁵⁾・福田泰子⁶⁾

(¹⁾ 北海道大学大学院農学院, (²⁾ 国際農林水産業研究センター, (³⁾ 大阪府立大学大学院, (⁴⁾ 北海道農業研究センター,
(⁵⁾ 名古屋大学大学院, (⁶⁾ 広島大学大学院)

2010年9月4・5日に行われた第230回講演会(北海道大学)において、9月5日に標記の小集会を行った。今回の小集会は幅広い話題提供を期待し、講演主体の第一部(12:00-13:00)と議論主体の第二部(16:00-18:00)の二本立てとした。

第一部は「海外を舞台として研究をする意義」と題した。今回は内容を現場重視とし、作物学とは分野の異なる日本工営の佐藤周一氏に途上国での灌漑事業とSRI普及事業についてご講演頂いた。第1部には30名の参加者があった。灌漑事業では、前任のアメリカが事業を成功させることができなかったことから、途上国で事業を継続的に成功させることの難しさが論じられた。その中で、プロジェクトの成功には、現地のニーズをくみ上げて柔軟に事業を多様化させること、受益者の事前同意を前提条件として義務付けることなど、一方的に途上国に事業を施すのではなく、双方の理解の上で事業を行うことの重要性が強調された。また、事業を単発にせず連続的に発展させていくための試みとして、プロジェクト進行中に次期案件の計画立案や事前調査を同時平行的に進めていく「Special Study」という手法が紹介された。SRI普及事業においては、生産現場における実践例や普及に際しての工夫などが紹介された。今回の講演を通して、普段知ることのできない開発プロジェクトの立案から進行、結実までの具体的な流れを理解するとともに、現場に足を運びそこでのニーズを汲みながら生産する側と相互に物事を進めていくことの重要性を感じることができた。

第二部は、若手の会に活発な活動がないという背景から、「若手の会で多収記録を目指そう!」と題し、若手の会による共同研究の提案を行った。共同研究は次年度に参加者が取り組んだ多収記録の成果を統合することで行う。そこで小集会では、多収記録に挑戦しやすいように、発起人が各作物の多収事例を紹介した後に具体的な多収技術についての議論を行った。第2部には20名の参加者があった。議論では、イネやバレイショでは多収要因に焦点が当たる一方、コムギやダイズでは減収要因に焦点が当たるなど、日本における各作物での問題意識の違いが浮き彫りにされた。また多収技術には、密植や倒伏防止、湿害対策などの栽培管理方法や、短カンから長カンへのバイオマス増大や、耐倒伏性の獲得、群落構造の改良、通気組織やROLバリアの獲得などの品種育成の方法など多数の意見が取り上げられた。

小集会後のアンケートでは若手の会で具体的な活動を行うことに対しては好意的に受け入れられていた。しかし、実際に取り組むという人は多くなく若手の会全体で活動を行う難しさを認識させられた。しかし、若手の会で具体的な案件に取り組むといった活動はまだ試行錯誤の段階である。今後、本小集会をきっかけに若手の会による大きなプロジェクトに向けた動きが活発になることに期待したい。

謝辞：本小集会にあたり、ご講演頂いた佐藤周一氏に心から感謝いたします。